触れる
― ブーバー対話思想における反転の力学 ―

グェンティ　ホンハウ

1．問題の所在

1－1．対話をめぐる二つの問い

本稿はユダヤの思想家マルティン・ブーバー（Martin, Buber 1878-1965）の思想を導きとして、人の生成変化に影響を与える関係的事象を語る試みである。人は他者と出会い（Begegnung）、影響を与え合いながら変化し、そのような「関わり」（Beziehung）に支えられ、生きている。ブーバーは、このような営みに「対話」（Dialog, Zwiesprache）という言葉を緩やかに与え、その内実を細やかに考察しながら独自の思想を積み上げた。そして、その「対話が人に及ぼす影響」こそ、彼の最たる関心であったという [Rob Anderson and Kenneth N. Cissna 1997: 54] [1)]。

そして、以下の二つの問いが本稿全体の通奏低音となる。「我―汝」「我―それ」、「出会い」（Begegnung）、「対向性」（Gegenseitigkeit）、「交互性」（Wechselseitigkeit）、「相互性」（Mutualität）といった彼の術語は、「対話」という事象をそれぞれの角度から照射するものである。だが（1）これらの言葉に象られる対話が人に影響を与えるプロセスと、その構造とはいかなるものであろうか。

1957年になされた心理学者ロジャーズとの討論において、ブーバーは、彼の思想形成のきっかけとなる体験や自らの思索が抱える重要な問題に関して率直な言葉で語っている。その中で「対話」についてこのように語る箇所がある。「対話は沈黙によっても可能です。…黙って一緒に歩いている、ただそれだけで対話になっていることもあるのではないでしょうか」[同上]。沈黙において共にいることさえも対話であるならば、「黙って一緒に歩いている」その二人の間にいったい何が起こっているのか。そして、対話というものが、交わされる言葉や目に見える行為のみならず、その水面下で、あるいは、言葉や行為なしにも、そこにいるということだけで生じうる事象であるならば、(2) 目に見えて明らかではない対話において生起するものを、私たちはいかにして考え、また語りうるのだろうか。

これら二つの問いに応答しうる言葉を探る糸口となるのが、ロジャーズとの討論の冒頭におけるブーバーの以下の言葉である。

「…相手によって変えられるということに私が開かれているのでなければ、相手を変えたいなどと望む権利はないのだと感じていました。相手に触れること（touch, Berührung）、相手との接触（contact, Kontakt）が、多かれ少なかれ、何かを変えることができるのです」

[同上 : 21= 2007: 44]

「相手を変える」とは、自らが相手によって変えられうる開かれた状態にあるときにはじめて生ずるものであり、その変化を生起させるものが、ここでは「触れること」(touch, Berührung)、「接触」(contact, Kontakt) という言葉で表現されている。「触れること」及び「接触」は彼の思想の術語として注目されることは稀である。しかしながら、1950 年になされたエルサレムの教育ラジオ講演において、ブーバーは「接触」(Kontakt) を「教育の根元語」(Grundwort der Erziehung)であると語っている [2005: 359]。上記した引用の中で語られる「接触」と教育の根元語として語られる「接触」は、同様の事柄を指し示すべく使用された術語なのだろうか。そして、それと並列的に語られる「触れること」という言葉はどこからやってきたのだろうか。

１－２．Berührung の足取り

ブーバーのテクストを丹念に見て行くと、他にも重要な箇所で Berührung や Kontakt が使用されている箇所を発見することができる。それらを、主に彼の『哲学的著作集Ｉ』から拾い上げて年代順に並べたのが以下の表である[2)]。

（表１）

テクスト	出版年	Berührung と Kontakt 使用回数と該当頁
ダニエル	1913	B 1 [11]　K 0
我と汝	1923	B 10 [88, 90, 96, 119, 120, 131, 154, 158]　K 0
対話	1930	B 4 [179, 190, 195, 196]　K 0
人間の問題	1943	B 2 [392]　K 0
ベルクソンの直観の概念	1944	B 1 [1075]　K 6 [1074, 1075, 1076]
接触について	1950	B 0　K 3[2005: 359]
二つの信仰形態	1950	B 0　K 6 [654, 655]
神の蝕	1953	B 0　K 5 [516, 527,571, 598]
ブーバー・ロジャーズの討論	1957	B(touch)1[1997: 21]　K(contact)4[1997: 21, 44,103]
我と汝「あとがき」	1957	B 1 [165]　K2 [162, 165]

（表 1）から、前期ではほぼ Berührung が使われ、後期になって Kontakt が多用されていく傾向をはっきり見て取ることができる。この二つの語は、確かにブーバーの思想の重要概念として認識されてはこなかった。しかしながら、それらの用例を他の重要な述語と往復して読み解くことから、「触れること」や「接触」が指し示す事象を浮き彫りにすることができるのではないだろうか。その作業は、さらに「接触は教育の根元語である」というブーバーの言葉の所以を明らかにすることへ繋がっていくはずである。

本稿では、ブーバー後期の思索と「接触」の関連は別の機会に譲り[3)]、彼の前期の思索に焦点を当てて特に主著『我と汝』おける「触れること」の用語法を確認することから、対話と「触れること」の関連を明らかにしていくこととする。ここで必要とされるのは、まず対話のプロセスをブーバーの重要概念とされる「出会い」や「相互性」といった用語を通して整理し、その構造を明らかにすること。そして、用語法を確認しながら、対話のプロセスや構造の中に「触

れること」がどのように位置づけられうるかを確認することである。これらの作業を通し、Berührung（触れること）を、ブーバーの思想の重要な術語として、また、冒頭の二つの問いに応答しうる言葉として提示することが本稿の目的となる。

２．対話のプロセスと構造

２－１．根元語の二重性と原体験

主著『我と汝』（Ich und Du, 1923）は、まずもって人間の語りうる二つの「根元語」（Grundwort）、「我－汝」（Ich-Du）と「我－それ」（Ich-Es）の「二重性」（Zwiefalt）から語り出される。

「世界は人間にとっては、人間の二重の態度に応じて二重（zwiefältig）である。人間の態度は、人間が語りうる根元語が二重であることに応じて二重である（一部改訳）」[Ⅰ : 79= 5]

「根元語」とは、＜私＞と＜世界（他者）＞とその間の＜関係性＞を顕現せしめる存在でもって語られる言語であり、「根元語」を語る＜私＞と関係を結ぶパートナーの様態を同時に表す「対の語」（Wortpaar）である。「根元語」の語りに応じて、人間の態度と世界の在り様は刻々とその姿を変え、私と他者の関係は切り開かれていく。この二つの「根元語」に関する先行研究は数多存在するため、ここでは定義的言及を避け、「根元語」の原体験ともいうべき少年ブーバーのエピソードを見る中で、双方の相違と関係を浮き彫りにしていきたい。そのエピソードとはブーバーが 11 歳の頃のこと。夏になると祖父母の農場で過ごしていた少年ブーバーは、人の目を盗んで馬小屋に忍び込み、馬とたわむれるのを楽しみとしていた。それは彼によって、深い感動を呼び起こす大きな出来事であった。

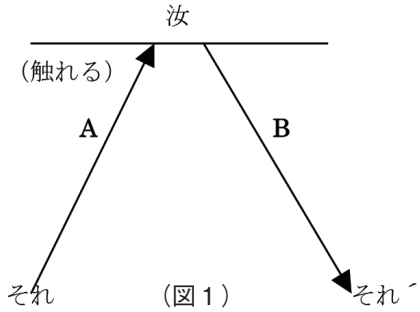
「手のしたに生命の満ちたものが脈動しているのを感じていると、まるで私の掌の皮膚に生命力そのものの要素、実に他者それ自体（das Andere selber）であるものが接している（grenzen）かのようであった。…しかも、それが私を誘いよせ、おのれを私にゆだね、私と共に根元的に汝と汝を存立させていたのである（elementar mit mir auf Du und Du stellte）（一部改訳）」[Ⅰ : 196= 228]

馬との交流の中で少年ブーバーが経験したのは、他者というものの途方もない他者性（das Andere, die ungeheure Anderheit）であり、それは彼を近づかせ、触れ（berühren）させずにはおかないものであった [Ⅰ : 196]。彼の思想における他者とは、ただ隔絶的なだけではなく、それゆえに「触れること」を惹起するものであり、他者性とは近接においてこそ逆説的に感ずるものなのである。二人称 Du で表されるその他者観は、この出来事にも象徴されている。

このエピソードには続きがある。馬との交流はある瞬間を境に消えてしまう。馬を撫でながらこの交流がどれほど自分を楽しませてくれることだろうと思った瞬間、少年ブーバーは自分の手を感じる。彼はそのとき相手と自分を隔てる境界を知ったのだろうか、馬との戯れはその

後もいつものように続けられたが「何かが変わってしまっていた」と彼は述懐する。そこには心沸き立つ交流が失われていた。馬がもう自分の働きかけに応えてくれなくなってしまったと感じた少年ブーバーは、相手を裏切ってしまったような後味の悪さとともに、この経験をずっと覚えていた。馬との交流の中で気づいたことと、人間存在やその関係性を基底するものとの関連を察知していたのである。

人間は世界に対して全く質を異にする二つの態度を取りうるという11歳の時の忘れ得ぬ気付きは、確かに彼の存在に刻印され、その思想の成熟を待って『我と汝』における「根元語」、「我―汝」と「我―それ」の「二重性」として結晶し、その後も姿を変えながら、彼の対話思想の根幹であり続けた。このエピソードを「根元語」によって語り直すならば、馬とのいきいきとした交流のなかで語られていたのが根元語「我―汝」であり、「この交流がどれほど自分を楽しませてくれているか」と状況を客観し、自らの手を意識して馬を対象化したときに語られたのが「我―それ」であったことになる。この移り変わりを表したのが（図１）である[4]。少年ブーバーの馬との交流はベクトルＡを経験し、ある瞬間を境に、ベクトルＢへ移行していった。そして、このように二つの「根元語」が繰り返し交代していくことが、「根元語」の「二重性」として理解されてきたのである。



（図１）

では、ブーバーの思想の重要な術語とされる「出会い」や「相互性」といった事象は、「それは汝になり、個々の汝はまたそれになる」というプロセスのいかなる側面を照射しようとするものであったか。『我と汝』における枠組みの中で対話のプロセスを詳細に確認しながら、それぞれの用語の位置づけと関連を次に整理する。

２－２．出会い、そして、対向性、交互性、相互性

ブーバーは「あらゆる手段（Mittel）が崩れ落ちたところに、出会いは生じる」と述べ、そこに対話が展開してゆく契機を見ていた。そして、彼が続けて語るのは、①「私が汝と出会うのは、汝が私に向かいよってくるから」ということと、しかし、②「そこへ歩み入るのはこの私の行為である」という二点である[Ⅰ：85]。このような「出会い」におけるブーバーの語りを整理してゆく。「出会い」は、汝が向かいよってくる「関わり」のはじめの衝撃にアクセントを置く。①で語られているのは、「出会い」における汝の顕現はやってくるものであり、汝が語りかけてくるからこそ起こるものであること。しかしながら、②で語られているのは「出会い」へと歩み入ること、つまり、汝の語りかけを聴くことは私の行為であるということであった。「出会い」は、向かいよってくる他者の顕現に対峙することであり、汝が語りかけてくることであるが、それは、他者を受容する行為、つまり、汝の語りかけを自ら聴くことなしには成立しない。こうして、関わりにおける能動的行為は受動的行為となり、受動的行為は能動的行為となってゆく。このような「出会い」の性質は受動と能動の反転としても言い換えられていたものであった。

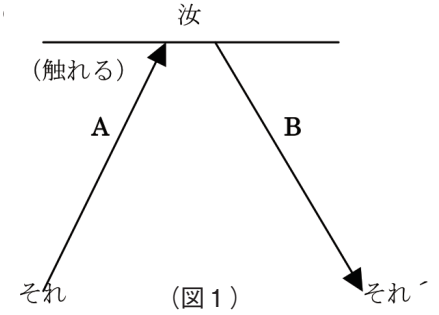
このような「出会い」において「相互性」はいかに生じるのだろうか。まず用語を整理する。

関わりとは「対向性」（Gegenseitigkeit）であり、そこでは「私が汝に働きかけるように、汝は私に働きかける」とブーバーはいう [Ⅰ : 88]。ここで「対向性」と訳した Gegenseitigkeit は、「相互的」[野口 1965: 23]、あるいは「相互的なもの」[田口 1978: 24] と訳され、そのまま「相互性」を表す概念として理解されてきた。しかし、私が働きかけるように、他者からも働きかけられるという「相互作用」（Wechselwirken）は、むしろ、「交互」（wechsel-）という側面にアクセントを置く「相互作用」（Wechselwirken）や「交互性」（Wechselseitig）という言葉が担っている意味合いであり、Gegenseitigkeit は、地続きにある相互作用を視野に入れた上で、むしろ、向かい合う（gegen-）といったニュアンスが強い。これらの訳は統一されず、往々にしてどちらも「相互性」として理解される傾向にあり、ブーバー自身『我と汝』においては、上記した引用の様に、Gegenseitigkeit の中に交互性（相互作用）も含めて捉え、明確に区別していない。

しかし、1957 年に加筆された『我と汝』「あとがき」において、ブーバーは、「対向性」（Gegenseitigkeit）と「交互性」（Wechselseitig）を区別し、そこから双方を「相互性」（Mutualität）という言葉に総括している [Ⅰ :162]。このことを踏まえて、ここでは対話のプロセスを詳細に見るためにも、「相互性」という一言のうちに混同されていた「対向性」と「相互作用」「交互性」を区別し、それらの差異を際立たせて捉えたい。関わりにある二人は、まず向かい合い（Gegenseitigkeit）、その上で、互いに与え、受け取り合う「相互作用」(Wechselwirken)「交互性」（Wechselseitig）を持ち、「相互性」（Mutualität）を成立させるのである。

さらに、「出会い」と「相互性」（Gegenseitigkeit ＋ Wechselseitigkeit= Mutualität）を合わせて、対話のプロセスをパラフレーズしてみる。関わりとは「対向性」、つまり、向かい合うことである。そのはじまりである「出会い」は、汝が私に向かいより語りかけてくることによって生起するが、その語りかけは、この私が汝へ向かうからこそ、聴こえてくるものであった。ここで受動と能動は互いに反転する。そして「語りかけ」を「聴く」私は、沈黙から応答へと促され、その応答によって「対向性」に「交互性」が加わり、そこには、互いに語りかけ、働きかけ、与え、受け取りあう「相互性」が成立する [Ⅰ : 100]。「出会い」と「相互性」から関わりを照射するとき、「語りかけと応答」に要約される「対話」の刹那に様々な関係性の動きを見ることができる。

しかしながら、改めて（図１）に戻ってみると、未だなお、対話の重要な段階が語られないままであることに気づく。「それが汝へ」向かってゆくベクトル A だけが語られ、「汝がそれへ」変化するベクトル B が語られずに残ってしまっているのである。つまり、「出会い」と「相互性」という用語だけでは、汝へと向かってゆく方向だけが語られ、それに続く汝との別離が語られないのであった。事実、他者性という汝の斥力を逸して、その引力のみを語る「出会い」が流通し、そのような傾向は「汝」へと向かう方向を称揚する議論に接続して、ブーバーの対話思想はロマン主義的な匂いと共に理解されがちであった [吉田 2007: 113-114]。



（図１）

ならば、ベクトル A がベクトル B へと移っていく境、そして、対話における受動と能動を反転させ、

それと汝を反転させる契機とは何か。その反転の機制を突き止めることによって、対話のプロセスと構造はより明確に浮き彫りとなるのではないだろうか。そこで改めてテクストに戻ってみると、ブーバーが『我と汝』の中で、これまで見落とされていたベクトルＡのその先、ベクトルＢの手前に起こる事象を、「関わりの目的」（der Zweck der Beziehung）という言葉で語っている箇所を発見することができる。そこで示されるのが「触れること」（Berührung）なのである。

３．反転の力学としての「触れる」

３－１．「触れること」

ブーバーは「触れること」をあまり主題的には語らない。また、「触れること」は、重要な言葉に付随して用いられることが多いため、往々にして読み飛ばされてしまう。その用例をいくつか挙げてみると、まず、「参与（die Teilnahme）は、汝との触れあい（die Berührung des Du）が直接的であればあるほど、それだけ完全になる」[Ⅰ：120] という一文。また、汝の顕現としての「啓示」（Offenbarung）についての文脈で、そこには「永遠の力の泉があふれ、永遠の触れあい（Berührung）が待ち焦がれ、永遠の声が響き続ける」という一節 [Ⅰ：154]。もしくは、それの世界が汝の世界へと変化する瞬間について語っている「人間の精神の要素が、ただ触れてくるものの触れあい（Berührung des Berührenden）を待ち焦がれ、外へと破りでることがある」[Ⅰ：158] という表現。これらは重要な内容でありながらも、確かに Berührung を前面に出し、その定義付けや説明を加えようとするものではない。そのためか先述したように、ブーバーの思想研究において「触れること」が術語として認識されることはなかったといって等しい。しかしながら、『我と汝』の中に Berührung が主題的に語られる箇所がある。

> 「関わりの目的は、その本質（Wesen）、すなわち汝の触れあい（Berührung des Du）である。なぜなら個々の汝に触れること（Berührung）を通して、永遠の生の息吹（ein Hauch des ewigen Lebens）が私たちに触れる（anrühren）からである（一部改訳）」[Ⅰ：120= 1978: 84]

この引用において、汝の「触れあい」とは、関わりの本質であり、関わりの内在的目的であること。そして、個々の汝に「触れること」を通して、永遠の生の息吹に「触れられる」という超越的契機が生じることが述べられている[5)]。ブーバーは関わりを「受動であると同時に能動である」というが [Ⅰ：85]、このような受動と能動の反転は、そこに「触れる」という出来事を見出してこそ理解される。意図的に触れようとすれば、人は自分と相手を意識し、相手を対象化してしまう。そして、それは「触れる」ではなく、切り取り、掴み、把握することとなり、そこに他者としての汝は顕現しない。関わりの能動的参入は、向かいよってくる汝に受動的に触れられることであり、そこで能動は受動へと反転し、汝の触れあいを受け入れる受動性は、こちらから汝に触れていく能動性ともなる。「触れること」とは、そのまま触れられ、触

れあうことと同義なのである[6)]。この反転の機制は「対向性」と「交互性」が混同され、関わりが「相互性」と「出会い」という言葉によってのみ語られるとき、埋もれてしまいがちである。これらのことを踏まえながら、「出会い」や「相互性」を整理する中で見えてきた対話のプロセスに「触れる」という契機を位置づけ、それらの関連と構造を示したのが以下の図である。

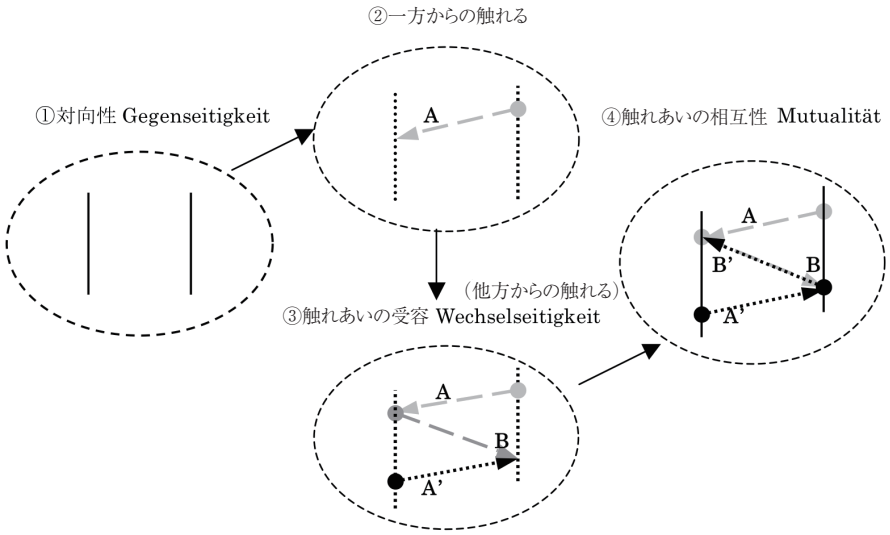


図２

上の図に示されるように、汝がそれへと反転する「触れる」という契機は、「出会い」や「相互性」といった用語だけでは掬い取ることのできなかったベクトルＡとベクトルＢの狭間に位置づけることができる。では、「触れること」において、汝をそれへと押し戻す反転の力学とは何か、言い換えれば、「触れる」という出来事から、いかにしてベクトルＢが生じるのかを、次に見ていきたい。

３－２．超越的契機としての境界／限界

ロジャーズとの討論においてブーバーは、対話に関する自らの思索における非常に重要な点は「限界」（limit, Grenze）の問題であるとして、以下のように語っている。

「私が何かしたり、試みたり、望んだりするとき・・・ある瞬間、壁に突き当たります。この境界（boundary）、限界（limit）を、私はどうしても無視することができないのです。このことは、私が何よりも関心を持っているもの、対話が人間に及ぼす影響についても当てはまります。・・・十全な対話においてさえも、そこには限界があるのです」[Rob Anderson and Kenneth N. Cissna 1997: 54]。

『我と汝』の中で「限界／境界」（Grenze）は「個別化」（Individuation）とともに語られる。ブーバーによれば、関わりは「個別化」に基づき、その「個別化」は関わりの無上の喜びであ

ると同時に「限界／境界」でもある。なぜなら、「個別化」によってのみ異なる者が互いを認識し合う（Einandererkennen）ことができるが、まさにそのことによって完全に知ることも知られることも断念せざるをえないからである[Ⅰ：145]。そこには、分け隔てられている者同士が関わることの逆説性がある[7)]。

他者である汝は、自らに回収して把握し、認識しようとすれば、立ちどころに消失してしまう。汝は認識し得ないという「限界」を突きつけることでしか自らを明かさない。それは、互いを隔て個別化する「境界」を改めて「知る」（erkennen）ことでもある。そのような汝との関わりとは、「限界」を突きつけてくる他者の顕現に立ち会い、そこで汝の「境界」に触れ、触れられて、互いを隔てる「境界」を発見し、再び汝から離れてゆくものなのである。こうして「触れること」とは、汝との「境界」にかろうじてアプローチしながら、自らの限界を知りつつ、他者から離れてゆく身ぶりとして受け取ることができるのであった[8)]。

完全に認識し、把握することのできない汝の「境界」。そのように互いを隔てる「境界」。そこで感知する関わりの「限界」。これらの「境界／限界」（Grenze）に「触れること」こそが、いったん脱自した我が、改めて他者から自身に回帰していくベクトルＢを生み出す斥力、さらにはこれまで「他者の他者性」と呼ばれてきたものなのである。そして、汝に「触れる」という出来事は、この「境界／限界」へ向かい、反転して自らに回帰する一連のダイナミズムを生起させる身ぶり、対話を展開させていく関わりの力学として受け取り直すことができるのであった。

３－３．根元語の反転、あるいは、二重性

「我－それ」が「我－汝」となり、再び「我－それ」へと戻ってゆく。この二つの根元語が交代する中で「対向性」や「出会い」、「交互性」、「相互性」といった事象が交錯して縺れ合い、その決定的な転換には「触れる」という契機があった。このように「根元語」の語られ方によって対話が展開し、世界が切り開かれてゆくとしたブーバーの思想は、先述した『我と汝』の冒頭の言葉、「世界は人間にとっては、人間の二重の態度に応じて二重（zwiefältig）である（一部改訳）」[Ⅰ：79= 5]に結晶している。そして、「根元語」の「二重性」は、二つの在り方が繰り返し交代していくこととして解されてきた。人は「我－汝」を語り、他者と出会い、「汝」の顕現に立ち会う。しかしながら、「汝」の顕現は瞬間であり、事後的にしか把捉することができない。対象を意識したときには、すでに主客を分離する「我－それ」が語られているからである。こうして再び「汝」となりうる潜在性を持ちながら、対象は新たな「それ」へと戻り、そのことによって、新たな認識（Erkenntnis）、作品（Werk）、形（Bild）、規範（Vorbild）がこの世界に現れ出る[Ⅰ：103-104]。このように二つの「根元語」が、交代しながら世界を形成してゆくことが「二重性」として理解されてきたのである。

だが、一方でブーバーはこのようにも語っていた。「それは蛹であり、汝は蝶である。ただこの二つの相は必ずしも判然と交代（reinlich ablösen）するのではなく、しばしば深い二重性（Zwiefalt）の中で複雑にもつれあったひとつの現象となっている」[Ⅰ：89= 26]。ここでは、判然とした「交代」と深い「二重性」が区別して考えられている。ならば「根元語」の「二重性」とは何か、小野（2008）の論考はその点に焦点を当てている。

小野は「二重性」と訳されてきたZwiefalt/ zwiefältigを「襞の折り目」あるいは「人間に内在する不断の反復運動」として理解しなければならないといい、「汝」が「それ」へと落ち込まざるをえない所以を「根元語」（小野の論考では「基本語」）の折り目、つまりZwiefalt（襞）ゆえの反転であるとした。彼によれば「折り目」とは、他者が＜汝＞として現れる一つの＜臨界＞＜閾＞であり、そこで「＜それ＞であったはずのものが＜汝＞へと転換し」、「受動が能動に、能動が受動に反転する」。こうして「二重性」とは「根元語」の交代のみならず、「人間が抱え込んでいる襞」の展開、そして「潜在と現実」の「程度」の深さとしての立体的世界の表現へとその意味合いを深化させてゆくのである[2008: 51, 53-56]。

このような小野の議論を踏まえれば、本論の考察は、「臨界」「閾」が立ち顕われる瞬間を、汝の「境界」あるいは、それによって生ずる関わりの「限界」に「触れること」であるとし、そのような「触れる」という出来事を、汝とそれ、受動と能動の反転を起こして「根元語」の不断の反復を誘発し、「対話」を展開させながら人間の抱え込む襞を深めてゆく力学として提示する試みであったことになる。

４．対話における反転の力学としての「触れる」

本稿のねらいは、人の生成変化に影響を与える関係的事象を語る試みの一途として（１）「対話」におけるいかなる契機が、人に影響を与え、変化を生じさせ、人を支え、生かしていくか、（２）目に見えて明らかではない「対話」において生起するものをいかにして考え、また語りうるのか、という二つの問いに応答することであった。そして、その糸口として、ブーバーが諸処で語っていた「触れる」という出来事に注目し、「出会い」や「相互性」といった他の術語との関連を確認しながら、対話のプロセスの中に「触れる」という身ぶりを位置づけ直し、「触れること」を対話において受動／能動、汝／それの反転を生みだす力学として再発見したわけである。

最後にブーバーの対話思想の反転の力学として「触れること」の諸特徴を提示し、まとめとする。

一、「触れること」は、同時に「触れられる」ことであり、そこで受動と能動は互いに反転する。

二、「触れる」という出来事の中で、他者へ脱自するとき「それ」は「汝」へと反転し、そこから自身に回帰するとき、「汝」は「それ」へ反転する。

三、「触れること」は、関わりにおいて、互いの「境界」を発見し、汝の他者性によって自らの「限界」を認識する出来事である。

四、「触れること」は、汝の引力と斥力を媒介し、対話における一連の事象プロセス動かす反転の力学である。

本稿では、主に「対話」における他者と関係性の変化の諸相を見てきた。だが、ブーバーは「対話」を通して生成する「私」にも言及し、「私は汝に接して生成する、つまり私は汝を語ることによって私になるのである」（Ich werde am Du; Ich werdend spreche ich Du）[Ⅰ : 85]とも述べている。「汝」に触れる「我」に焦点を合わせるとき、汝の「境界」の発見は、同時にその「境界」にぶつかる我の「境界」の発見でもあった。汝の「境界」に突きあたりつつ汝を語り、自らに回帰する我の生成によって、はじめて言葉による応答が生まれ、新たなそれが現

成する。「それが汝になり、個々の汝がそれになる」という一文のなかに抜け落ちていた、共に変化し、更新される「我」に気づくとき、汝との「境界」という関わりの「限界」は生成の可能性へと開かれるのである。

このような「触れる」という出来事が触発する「我」の生成変化に関しては、稿を改めて、より詳細を論じる必要がある。また、本稿の考察を踏まえながら、ブーバーの後期の思索における「接触」(Kontakt) を主題として、「触れること」が「接触」へ変遷してゆく所以、そして「接触」を生起させるメディアを明らかにしながら、「接触は教育の根元語である」というブーバーの言葉を読み解いていくことを、さらなる課題としたい。

注

1）引用および引用参考文献は、角括弧 [ ] 内に、著者名、文献の出版年、コロン : の後で該当する頁数の順で示す。ただし、煩雑さを避けるために、文献が容易に同定できるときには出版年等を省略している。また、翻訳書を参照した場合は、原著のあとに = で区切って、翻訳の該当頁数を記した。ブーバーの著作集からの引用の場合、著者名を省き、著作集の巻数、もしくは出版年のみを示し、コロン : の後で該当する頁数のみ表記する。

2）ここでは、解釈を挟まず、字面に現われる Berührung と Kontakt のみをカウントした。また、Berührung の中には、動詞 berühren のみを含め、rühren、anrühren は外した。『著作集Ⅰ』以外に掲載されているテクストで、特に注目すべきものに関しては、太字にて表示し、頁の前に掲載されている著作集の出版年を記した。

『著作集Ⅰ』に掲載されている他のテクストで、出版年が隣り合っており特に異例のないものについては、表に出さずここで言及する。その中で、Berührung が使用されているものは、「教育的なるものについて」(1926, S.801, 802) 2 回、「単独者への問い」(1936, S. 241) 1 回、「語られる言葉」(1960, S.444, 464) 2 回。Kontakt が使用されているものとしては、「原距離と関わり」(1950, S. 421) 1 回、「善悪の諸像」(1952, S. 614) 1 回、「人間の間柄の諸要素」(1954, S. 269, 271) 2 回、「罪と罪責」(1957, S. 476) 1 回であった。また、「共同的なものに従うこと」(1956) では Berührung が 1 回 (S. 464)、Kontakt が 3 回 (S. 466, 467) であった。この表は、二つの語の推移を見るためのもので、回数のみで「触れる」という語の重要さを推し量ろうとするものではない。

3）Kontakt に言及している先行研究は僅かだが、見る限りでは、斉藤、関川、Muth、Hendley の研究が挙げられる。しかしながら、いずれの研究もブーバーの対話思想と往復する形で Kontakt の意義を明らかにするものではない。また、Berührung に関して主題的に考察している先行研究は現在見ている限りではみつかっていない。

4）西平 (2009)『世阿弥の稽古哲学』の中に掲載されている図を参考に作成したものである [29]。従って、図に関する西平の但し書きが、ここでも当てはまることになる。「図は理解を助けるための便宜的な作業仮説に過ぎない。あくまで問題の所在を指し示すために飲み機能する。理解を固定してしまう危険に対しては常に警戒しなければならない」[251]。

5）引用の中の「永遠の生の息吹」は、ヘブライ語で風、霊、精神を意味する「ルーアッハ」が含意されている。しかしながら、「ルーアッハ」と Berührung、Kontakt の関係については別稿に譲ることとする。また、Berührung の訳語になっている「触れる」という日本語については、坂部の一連の論考が存在する。例えば、「風の通い路」というエッセイにおいて坂部はこのように述べる。「さまざまな感覚与件を媒介にして、われわれは、端的に風のいのちに『ふれる』、といったらよいだろうか。あるかなきかの風に、心をひそめて『いのち』の気配を感じ取るとき、そこにあるのは、微細であればあるほど確かに感じ取れる『いのち』の『響きあい』にほかならない。風が『ふれ』てくるとき、われわれは、ひとつのいのちの息吹に『ふれ』る」[坂部 2007 : 401-402]。

6）坂部は「『ふれる』ことはつねに『ふれ合う』こと、いうなれば、惰性化した日常の境域の侵犯であり、能動－受動、内－外、自－他の区別を超えた原初の経験である」と述べている [1983: 4-5]。

7）ここで語られる「個別化」の逆説性は、後期の哲学的論文「関わりと原距離」（Urdistanz und Beziehung, 1950）のなかでさらに深化して論じられることとなる。

8）後期の論文「神の蝕」（Gottesfinsternis, 1953）において、「接触」（Kontakt）の中で出会う他者は、把握することなどできない他者性を自覚して、その存在を取り込もうとする試みを断念するとき初めて、真の汝となるとブーバーは述べている [1962: 571]。このことは、Berührung においても当てはまるであろう。

＜引用文献＞

Buber, M. 1962 *Werke Ⅰ : Schriften zur Philosophie*. Kösel Verlag KG, München und Verlag Lambert Schneider DmbH, Heidelberg.（本文ではⅠと略記）

（1913）Daniel. Gespräche von der Verwirklichung, S.9-76. = 1969 佐藤吉昭訳「ダニエル」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1923）Ich und Du, S.77-160. = 1958 野口啓祐訳『孤独と愛－我と汝の問題－』創文社＝ 1978 田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房

（1926）Rede über das Erzieherische, S. 787-832. = 1970 山本誠作訳「教育論」『ブーバー著作集 8 教育論・政治論』みすず書房

（1932）Zwiesprache, S. 171-214. = 1978 田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房

（1936）Die Frage an den Einzelnen, S. 215-266. = 1968 佐藤吉昭・佐藤令子訳「単独者への問い」『ブーバー著作集 2 対話的原理Ⅱ』みすず書房

（1943）Das Problem des Menschen, S. 307-408. = 1961 児島洋訳『人間とは何か』理想社

（1944）Zu Bergsons Begriff der Intuition, S. 1071-1078. = 1970 三谷好憲訳「ベルグソンの直観の概念」『ブーバー著作集 8 教育論・政治論』みすず書房

（1950a）Urdistanz und Beziehung, S. 307-407. = 1969 稲葉稔訳「原離隔と関わり」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1950b）Zwei Glaubenweisen, S. 651-782. = 1968 板倉敏之『キリスト教との対話』理想社

（1952a）Gottesfinsternis. Betrachtungen zur Beziehung zwischen Religion und Philosophie, S. 503-604. = 1968 三谷好憲・山本誠作訳「かくれた神」『ブーバー著 作集 5 かくれた神』みすず書房

（1952b）Bilder von Gut und Böse, S. 606-650. = 1968 水垣渉訳「善悪の諸象」『ブーバー著作集 5 かくれた神』みすず書房

（1954）Elemente des Zwischenmenschlichen, S. 267-290. = 1968 佐藤吉昭・佐藤令子訳「人間の間柄の諸要素」『ブーバー著作集 2 対話的原理Ⅱ』みすず書房

（1955）Der Mensch und sein Gebilde, S. 424-441. = 1969 稲葉稔訳「人間とその形像物」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1956）Dem Gemeinschaftlichen folgen, S. 454-474. = 1969 稲葉稔訳「共同的なものに従うこと」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1957）Schuld und Schuldgefühle, S. 475-502. = 1969 稲葉稔訳「罪責と罪責感情」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1960）Das Wort, das gesprochen wird, S. 442-453. = 稲葉稔訳「語られる言葉」『ブーバー著作集 4 哲学的人間学』みすず書房

（1961）Aus einer philosophischen Rechenschaft, S. 1109-1122. = 1970 三谷好憲訳「或る哲学的弁明」『ブーバー著作集 8 教育論・政治論』みすず書房

2005 *Werkausgabe8: Schriften zu Jungen: Erziehung und Bildung*, Gütersloher Verlagshaus, Gütersloh, in der Verlagruppe Random House GmbH, München.

（1950c）Über den Kontakt, S. 359.
Hedley, B. 1987 Martin Buber on the Teacher/Student relationship: a critical appraisal, *Journal of Philosophy of education Vol.12.*
Muth, C. 2006 Nicht für die Theorie, sondern für DAS LEBEN ERKENNEN wir, Gestaltkritik.
Rob Anderson and Kenneth N. Cissna, 1997 *The Martin Buber-Carl Rogers Dialogue: A New Transcript with commentary*, State University of New York Press, Albany. =1965, Öffentlicher Dialoge zwischen Martin Buber und Carl Rogers, S.236-258, in 2008 *Werkausgabe10: Schriften zur Psychologie und Psychotherapie*. Gütersloher Verlagshaus, Gütersloh, in der Verlagruppe Random House GmbH, München. = 2007 山田邦夫監訳、今井伸和、永島聡訳『ブーバー―ロジャーズ対話』春秋社
小野文生 2007「分有の思考へ―ブーバーの神秘主義的言語を対話哲学へ折り返す試み―」『教育哲学研究』第 96 号　教育哲学会
2010「マルティン・ブーバーにおける言語・時間・力―＜隔たりと分有＞の哲学とは何か―」教育思想史学会第 20 回大会フォーラム 1 報告
斉藤昭 1993『ブーバーの教育思想の研究』風間書房
関川悦雄 2006「ブーバーにおける＜教育的なるもの＞（das Erzieherische）という語の検討―その語の解釈と意味を求めて」『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』第 72 号 日本大学文理学部人文科学研究所
坂部恵 1983『「ふれる」ことの哲学：人称的世界とその根底』岩波書店
2007『坂部 恵集 5 ：＜日本＞への視線、思想の文体』岩波書店
西平直 2009『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会
吉田敦彦 2007『ブーバーの対話論とホリスティック教育―他者・呼びかけ・応答』勁草書房

（臨床教育学講座　博士後期課程 1 回生）
（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

Touch: The Dynamics of M. Buber's Dialogical Thought

NGUYEN THI Hong Hao

Even though Martin Buber developed his thoughts in various fields, it seems that "dialogue", or "relationship", is the core of his philosophy. This paper attempts to consider a relational phenomenon that causes inner changes in humans by analyzing the concept of "touch" in M. Buber's dialogical thinking. The word "touch" has not been conceived to be as important as his other key concepts, such as "encounter", "mutuality" and "reciprocity". By making comparisons with these key concepts, we aims to develop the idea that the concept of "touch" had significant meaning in M. Buber's dialogical thoughts.